NODA・MAP 第27回公演
「正三角関係」
SPECIAL Interview Vol.❶

松本 潤

俳優が生身でしゃべって、動いて、表現することで完成する野田作品の魅力

演劇界の鬼才・野田秀樹率いるNODA・MAPの最新作が、北九州芸術劇場に上陸します。「カラマーゾフの兄弟」がモチーフの注目作で長男役を演じるのが、大河ドラマで主演を務めるなど俳優としての活躍も目覚ましい松本潤さん。舞台芸術の魅力、表現者としての現在地を語る語調にも熱がこもる、真摯な横顔をご覧ください。

文：川添史子　撮影：野坂茉莉絵

―― NODA・MAP最新作は、ドストエフスキー原作「カラマーゾフの兄弟」をモチーフに、松本さんが長男の花火師、永山瑛太さんが次男の物理学者、長澤まさみさんが三男の聖職者を演じる「唐松族の兄弟」の物語と伺いました。

原作自体に長大で難解なイメージがあると思いますが、野田さんらしい、壮大で複雑、入り組んだ物語になりそうです。もちろん、ただ人物や物語設定を引用するわけではなく、原作で描かれる人物たちの心理がリンクしていくユニークな構造になっているので、元を知っていれば読み解きやすくなる……というわけでもありません。野田さんは「ネットであらすじを読んで観に来るのがもっとも危険」と仰っていましたし（笑）、それならいっそ、まっさらな状態でご覧いただいた方がいいかもしれません。

―― 松本さんは野田さんと長年のお知り合いで、「いつかNODA・MAPに出演したい」と思い続けていたとか。野田さんの印象を教えてください。

大先生に恐縮ですが、語弊を恐れず言うと……“変わったおじさん”でしょうか（笑）。自分の親と同じ年代なのに、全く年齢差を感じないんですよ。あれだけ天才的でダイナミックかつ詩的な作品をつくる方ですが、普段の野田さんはとてもフランクでいらっしゃるんです。

―― “演劇界の鬼才・野田秀樹”という世間のイメージとは、また違う部分でお付き合いされてきたのですね。松本さんの舞台出演は、蜷川幸雄演出『あゝ、荒野』（2011年）以来13年ぶりとなります。

これだけ間があくと、初舞台のような気持ちです（笑）。去年は一年間大河ドラマ（NHK『どうする家康』）をやらせていただいたので、声の使い方が映像向きになってしまっていることもあり、それを徐々に調整し、早く生の舞台感覚を取り戻したいですね。でもワークショップで身体を動かしているだけでも発見があって面白いですし、NODA・MAPはアンサンブルの皆さんを含めたチーム感やそのクオリティの高さが素晴らしいです。演出家である野田さんの意図を汲み取るのも早いですし、常に新しいアプローチ方法を探り続ける姿に圧倒されます。舞台経験が豊富な皆さんとご一緒し、たくさんのことを吸収させていただきたいと思います。

―― 2006年に出演された同じく蜷川幸雄演出『白夜の女騎士（ワルキューレ）』は、野田さんが80年代に書いた戯曲でした。野田作品の印象、あるいは魅力についてどう感じていらっしゃいますか？

正直、最後の最後まで「これ、どういうことなんだろう」と思いながらしゃべっていたセリフもありました（笑）。でも頭で理解するよりも身体と心が動いていくというか、言葉が押し寄せてくることで生まれるスピード感とテンポに、気持ちよく翻弄されてしまうんです。リズムに身を委ねているだけで「気持ちいい！」みたいな感じでしょうか……このシビれる感覚は一体なんだろう？と思いながら、あのときは演じていました。もちろん戯曲としても素晴らしいですし、僕は言葉の響きや身体表現で感動させる、俳優が生身でしゃべって、動いて、表現することで完成する部分がとても大きいと感じています。客席に座って観ている時は、遊び心にあふれたセリフが波のように押し寄せ、言葉に酔ってしまう感覚になりますよね。だから、ちゃんと心と身体のコンディションを整えて、いつも心して観に行くようにしています。

Information

NODA・MAP 第27回公演「正三角関係」
9月5日（木）～11日（水）
J:COM北九州芸術劇場 大ホール
［作・演出］野田秀樹
［出演］松本潤、長澤まさみ、永山瑛太 ほか
6月23日(日) 12時 チケット一般発売開始！

公演情報詳細はこちら